

満州

熱河の山で

愛知県 椎原芳郎

「第一乙種合格」宇都宮連隊区の徴兵官の中佐から言い渡された時、私は耳を疑った。強度の乱視、瘦せて青白い顔をした私が国家の干城として採用されるとは平素望んでいただけに嬉しかった。兵隊にゆけぬ若者は肩身の狭い当時の日本だった。昭和十七年四月は比島パターン半島陥落で沸いていた。

やがて入営兵令達書が届いた。翌十八年二月一日福島県郡山市東部第六十六部隊に入営を命ずとある。今までは連隊区管内の部隊に入営するのが当たり前であ

ったが、その頃から現役でも召集でも遠く九州あたりに入隊する例が始めていた。「どんな部隊だ」尋ねるが一向に不明だ。落下傘部隊、戦車隊、秘密部隊いろいろ無責任な話ばかり。

入隊までタツプリ時間があるので、この世の名残りと近所の友達と二人で富士登山に出かけ、途中親戚の家に泊まって別れを告げた。部隊の中味は判らぬが身体を鍛えねばと思ひ、柔道、剣道、角力を力一杯やった。

やがて出発の日の朝、母は小さな声で「生きて帰れ」だけ言った。当時父はすでに亡く、兄は開拓団の小学校教員として満州に在り、妹は病弱で床に伏せることが多く、母は心細かったのだと思う。同じ日に出発する若者六名を代表して駅頭に立ち見送ってくれた町

内の多勢の人に別れの挨拶をしたが、生還を期せずの意味からあえて「征って参ります」といわず「征きます」と力をこめて言って車中の人となり日の丸の波に送られ、一路郡山へと向かったのである。

部隊は案に相違して異なり、栃木、茨城の若者が集まった集合教育隊であった。戦闘帽の下士官が満州から初年兵受領に来ていた。行先は熱河省承德の第九独立守備隊の歩兵第十三大隊で、関東軍で唯一の実戦部隊で八路軍相手だと教えられ武者震いした。

磐梯山から寒風が雪を伴って吹き荒れる中で、約一カ月の訓練を終え、完全防寒軍装で市内を駅に向かつて行進したが、その日は暖かく沿道の日の丸の中を汗をタラタラ流しながら悲壮な気持ちで一步一步をしっかりと踏みしめたのが昨日のことに思い出される。

三月十五日下関出港、舷窓にぶつかる玄海灘の荒波のあなたに見え隠れする護衛の駆逐艦が、前になり後になり波を蹴立てる雄姿に感激しながら朝まだ明けきらぬ釜山に上陸、異様な臭気に大陸を感じた。

郡山出発から一週間目の三月十九日熱河省承德着、ここは有名な清朝の避暑山荘のある処で、熱水が湧き出る池がある熱河の名の由来であり、第九独立守備隊の司令部のある所でもある。赤土が一面に広がった埃っぽい感じ、蒙古に近いことを想わせる。彼方の山々は日本では見られない無気味な禿山で荒々しく、峨々たる山容とはこれをいうのか、目指す我が第三中隊はあの山の奥深く入った所で万里の長城の近くらしい。承德から歩いて四日かかる興隆には独立守備歩兵第十三大隊本部がある。

途中の険しい峠は常に敵が待伏せる処である。峠の手前の部落で宿営したが炊事の釜から豚の首がのぞいているのには驚いた。満州の豚は黒豚でエサは人糞だ。人糞で肥った豚を人間が喰うのだから気にしたら豚肉なんか喰えるものではない。続く行軍で扁平足の私は足の裏全面に豆ができ歩行困難になった。田口軍医大尉殿は「ヨク我慢したな」と馬に使う太い注射器でプスリ。血の混じった水が注射器いっぱい取れた。水が無くなってペタリくっついた皮と肉の間にヨーチン

にタツプリ浸した糸を通した途端「痛い」。翌朝足裏が腫れて歩けない。仕方なく落後兵一号となって馬車に乗せられる。険しい峠道を汗だくになって歩いてゐる古年兵や同年兵に恥ずかしいやら、申し訳ないやら身体を小さくして顔を伏せてガタゴト揺られていた。

砂漠のような赤土の平地を過ぎると、細い木しか生えていない荒涼とした鋭く尖った山が重なるような山波の中へ入ってゆく。漸く興隆に着いた。各中隊から初年兵係が新兵受取りに来ていた。夕食後、いろいろな注意や指示があった。目を閉じて聞いていると突然眼鏡の兵隊眠っているな「いいえ眠っていません目をつぶっているだけです」これがいけなかった。「貴様、文句があるか」ピンピン往復ピンタ第一号のお見舞いだ。軍隊生活で何百発と受けたピンタの始まりだった。

初年兵教育係の兵長は呉服屋上がりとかで、色白のノッペリした顔のやさ男だが、薄い目と薄い唇が蛇のような残忍さを示して無気味だ。上等兵は兵長と対照的で赧ら顔にギョロ眼の分厚い唇の鬼のようなゴツイ

男だ。新兵は内地組と現地組と混合だった。この二人は運悪く共に現地出身だから内地組はシツカリしごかれた。落後第一号でピンタ第一号の私は特に目標にされ、何かにつけ先ずピンタである。平手ピンタ、ゲンコツピンタ、上靴ピンタ、帯革ピンタ等ピンタオンパレードである。口の中は裂け、唇は分厚く腫れ上がって治るひまがない。歯はガタガタになり顔は腫れて変形した。

射撃の成績が悪かった罰として「踵を上げ、膝を半ば曲げ、棒け銃をして腕を前に伸ばせ」をやらされた時が一番こたえた。一分間も過ぎると油汗が出て膝がガクガク体全体が震え出して悔し涙が流れ出す。腕が疲れて下がると上等兵が待ち構えて撲る蹴飛ばす。兵長はそれを見てせせら笑って上等兵に「モットやれ」とけしかける。入隊前に抱いた愛国心。帝国軍人の誇りとあこがれは無残にも打ち碎かれ新兵は哀れ私刑に戦く奴隷に過ぎなかった。

在溝中の兄は、そんな弟とはつゆ知らず慰問の品を持って承徳に来てくれたが、山の中の弟に会えず砂糖

をまぶした大豆を託して帰った。

程なく届いた品の中の手紙には「上の人に食べてもらって可愛がつてもらえ」と書いてあった。その兄も今は亡き人になった。あまりやられるので思考力が無くなり「このままでは殺される」と恐怖感が募った。中隊は常時討伐に出ているので実弾は各自持っている。「いっそ……」と思うようになったのである。同年兵から「ひどくやられたな我慢しろよ」と慰められた時は思い詰めていた時だけに思わず涙が止まらなかった。

班長は私の異状に気付き、暗号兵の教育を受け司令部派遣を命じたので大事に至らなかったと今でも思っている。戦後戦友会が何回も催されるが、この兵長は一回も出てこない。誰に尋ねても消息不明である。是非お目に掛かりたいものである。上等兵はその後、討伐に出て用便中狙撃され弾が尻から腹に抜けた腸がハミ出て戦死したとか私の同郷で同年兵の衛生兵が手当てしたが即死状態だったそうである。散々いじめられた人だけに複雑な思いだったが、哀れという他あるまい。

山の中の中隊は兵舎が満人部落の真中であって、満州家屋を改造して使っているからオンドル（煙道）の上で寝起きする。電灯は無いからランプである。このランプ掃除が新兵の仕事の一つでもあった。水は谷川の水を汲んで大きなカメに貯めておく。洗面、洗濯は谷川でやる。新兵の腹は年がら年中腹ペコで乞食腹というそうだが、いくら食べても食べるそばから腹が減る。すぐ隣が満人の家だから覗いて見ると釜の中に黄色いお粥が見える。老婆に頼んで試食するがまずい。

熱河の山中は食物に乏しく現地人は松の樹の皮を粉にし、トウモロコシの粉を混ぜて粥にし常食にしていた。お菜は「たくわん」らしきものがあるだけで極めて貧しい生活であるから肥えた人は見たことがない。

熱河の風土病で有名なコブが喉や耳の後に風船玉の大きさでブラ下がついている。ヨード分（海草）不足が原因だと聞いた。

うちの中隊長は戦争上手で、八路から懸賞金付きで狙われたが、朱鞘の軍刀を杖に急な山路を大股でサッサと登っていく頼母しい大尉だ。班長は若い軍曹で

温和だったから兵長等を押え切れなかったと思う。

村の周辺には八路軍の工作員が出没するから油断を
すると拉致される。ある時古年兵が行方不明になった。
部落へ遊びに出たらしい。早速狩り出されて探したが
ついに判らなかつた。後日、部落民の話によると夜間
八路兵に戸板に乗せられていったそうである。

夜間、近くの山頂で立哨していると一山越えたあたりがポーと夜空を焦がして赤くなつた。隣の部落が夜
討ちをかけられたらしい。こちらの部落のロバが一頭
鳴き出すと全部落のロバが一斉に赤ん坊の泣き声に似
た哀調な鳴き声で合唱した。賑かというより物悲しく
なつた。

翌朝、電柱が切倒され、電話は不通になつていた。
敵が近くまで接近していたのだと緊張した。一期の検
閲を控えて訓練は激烈の度を深めていった。山に挟ま
れた狭い処だから川原が演習場だ。匍匐前進は腕の力
で前へ這い進むのだが着剣した銃は先が重いから砂の
なかへ突刺さりそうになる。帯剣の鞘は腰にブラ下が
っているから砂のなかを掬って進む格好になる。鞘の

中は砂だらけだ。これの掃除には泣かされた。いくら
掃除をしても剣を入れてガチャガチャやって抜くと剣
身に砂がついてくる。手入れ検査で見つかったら一卷
の終わり。平素睨まれているからソレ来たホイと上等
兵がニヤリ。

内地兵と現地兵と比べると現地兵は開拓団か満鉄出
身がほとんどだから体格も術科も優秀だった。学科で
は自信があつた私だが体力ではかなわない。特に駆け
足は苦手で常に最後尾だった。

扁平足を恨んだ時、既に遅しである。八路軍相手の
独歩だから山登りの練習はきつかつた。八路は両足に
砂袋をくくりつけて山登りの練習をやっているようだ
から速い。こちらの古年兵も負けずに速い。独歩が攻
めると八路は長城越えて北支軍の方へ逃げる。北支軍
は山地に不馴れなので八路に叩かれることが多かつ
た。独歩は山の尾根伝いに行軍するので足が弱くては
動まらない。夜の隠密行軍といつて地下足袋はいて足
の裏をドタバタ地面につけず外側から静かに押しつけ
る歩き方を忍者さながらに教え込まれた。山を駆け登

る訓練にアゴ出して頂上にひっくり返って仰いだ青空に浮かぶ白い雲が今でも懐かしい。

戦友にかつがれて山を降りたらしく、戦友会では今でも冷やかされている。一期検閲は雨のそば降る長城線近くで行われた。満州側の長城付近では八路军の工作員対策として住民の居住を許さず、無住地帯とし住民は集団部落に強制移住させられていた。検閲は龍洞峪の無住地帯の掃蕩を兼ねて行われたが、新兵は演習だとばかり思っていた。一人の老翁が谷間に突っ立っているに出合った。

敵の見張り役だった。幹候出の教官が始末するよう命令するが、新兵は突然のことにびっくりして誰も手を出さない。その内「アイヤー」と叫んで崩れるように倒れた途端、その悲鳴を聞いてか物陰に隠れてこちらから見えなかった小屋から黒衣の男五人が逃げ出した。追いかけてよとしたら「危ない伏せろ」佐藤伍長の声に思わずその場に伏せた。「ドカーン」手投弾が白煙と共に破裂した。「射て、射て」教官の声、銃の引き金に指をかけたが何故か動かなかった。敵はその

まま逃げ去った。食糧が隠されていた小屋は焼き払われた。あつという間の出来事だった。

検閲が終わり講評がどうだったのか覚えていないが、兵長や上等兵から何の罰も受けなかったから無事検閲も済んだのだろう。そのあと暗号教育を受けに承德に行くことになりやつと地獄から脱出できるぞとホッとした。

トラック二輛で出発だ。一号車に乗るよう指示されたが既に満杯で乗れないので仕方なく二号車に乗り、貨物の上に跨がり前進するうち、内地から来た時通った盤道岑の険しい峠を登り始めた。八路军の待伏せが時々ある難所である。「警戒を強めろ」右手は山で左手は急斜面で谷に落ちこんでいる。「ここでやられたら逃げ場がないぞ」と観念した。「バーン」敵襲、三十メートル位先を走っていた一号車の前輪の左のタイヤが潰れるのが見えた。ゆっくり一号車が谷へ落ちこんでゆく。荷物や兵士がポンポンと跳ね上げられゆっくり落ちていっては叩きつけられて動かない。まるで映画のスローモーションを見ているようだった。

二号車は一旦止まったが、すぐに発車、なぜ救助しないのかと思つたがそのままスピードを上げ承徳に着いた。一号車に乗っていた……と思うとゾーとした。

落ちた車を助けもせず軍隊は薄情なものだなあと思つた。後で聞いたが、あの峠は満軍の警戒駐屯地域なので満軍が直ちに救助に出動、死者二十人、負傷十人だつた由。二号車は敵襲と判断脱出したとのこと、敵襲だったのか単なるパンクだったのか新兵には知る由もない。いづれにしても自分の運の強さに感謝した。

その後いろいろあつた。南方転属を中隊長に願ひ出たが諭されて断念。終戦後アメーバ赤痢にかかり高熱で意識不明になつたが木炭の粉で九死に一生を得て治り、シベリヤに強制抑留され、炭坑作業の強制労働と飢餓で倒れる寸前、ダモイ列車に乗れたことなどを想ひ合わせると、私は強運の星の下に生きて来たと思う。

暗号教育の成績が良かったのか、そのまま司令部勤務となり、やがて二年兵の上等兵となり暗号教育の助手となつたが、初年兵を撲る気にはなれなかつた。やがて関東軍司令官命令で私的制裁禁止となり、我々は

撲られつ放しになつた。

ノモンハンからの手紙

静岡県 小山 芳江

私の夫、小山増治は、大正五年一月二十九日生まれで、支那事変の勃発するすこし前の昭和十二年三月に入営し、主に満州に勤務しました。

昭和十四年五月十二日にハルハ河で小部隊の衝突から、日ソ両軍の本格的戦闘に発展したあの「ノモンハン事件」には、重機関銃手として出動していました。関東軍一万五千は七月一日より反撃、緒戦では、戦車百両を擱座、炎上させるなど戦果を上げたようです。

八月二十日からソ連軍は四、五倍の兵力で攻勢に移り、次々と日本軍の陣地を奪取していったのですから、夫が兄小山正雄の所へ手紙を書いたのは七月三十日です。で戦闘のほんの少しの暇を見て書いたようです。

では全文を次に紹介します。